

※ ホームページ等で公表します。(様式 1)

立教 S F R - 院 生 - 報 告

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）

大学院生研究

2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科		英米文学 専攻
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・英米文学専攻・ 博士課程後期課程5年		小笠原 清香 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学研究科・教授		菊池 清明 印		
自然・人文・ 社会の別	自然	・ <input type="text" value="人文"/>	・ 社会	個人・共同の別	<input type="text" value="個人"/> ・ 共同 名
研究課題	強意副詞の通時的意味変化：文法化・語彙化とその動機付けに関する考察				
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程5年		小笠原 清香		
研究期間	2014 年度				
研究経費	(支出金額) 199,621 円／(採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

従来、強意副詞の意味変化については、具体的語彙から強意語への文法化・脱語彙化のプロセスが観察されてきた (Sinclair 1992; Partington 1993; Lorenz 2002) Méndez-Naya (2003) は Helsinki Corpus を使用し、*swithe* の文法化について詳細に論じているが、この語が強意用法の後に発達させる「迅速」の意味については特別に着目していない。本研究では、古英語 (OE) から初期近代英語 (EME) にかけて強意語として広く普及した *swithe* と、中英語 (ME) における強意語の一つであった *fast* の類似した意味変化のプロセスを通時コーパスと文学作品を用いて実証的に検証した。これらの語彙が脱語彙化した後、再び語彙化すること論証するために、動詞と強意語の共起について考察し、なぜ強意副詞が「迅速」の意味へと変化するのかを、スケールと評価的意味の観点から検討している。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[英語強意副詞] [再語彙化] [動機付け]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究概要

昨年度までの研究では、通時コーパスを使用した量的分析を通して、強意副詞であった *swithe* と *fast* が歴史的に同様の意味変化を経て、本来の ‘strongly’, ‘firmly’ 等の語彙的意味から、強意副詞へと脱語彙化し、その後「迅速」の意味へと変化する再語彙化のプロセスを明らかにした。今年度は、なぜ強意的意味から「迅速」の意味が派生するのか、この意味変化の動機付けについて、主に考察した。本研究では、これまであまり取り上げられることのなかった動詞修飾の強意副詞の意味変化を対象としている為、動詞修飾の強意副詞について、その意味的機能についても改めて分析している。スケールと評価性の関係性に着目し、強意から迅速への意味変化を引き起こす動機付けについて考察した。

2. 動詞修飾の強意副詞

強意語の文法化・脱語彙化を扱う先行研究では、対象を形容詞・副詞修飾の強意語に限定することが非常に多く、これまで動詞修飾の強意語の意味変化について踏み込んだ議論が行われることはなかった。まず本研究では、動詞修飾の強意語が動詞本来の語義に対して、どういった意味要素を付与しているのかについて検討した。

多くの先行研究において、強意語という呼称は形容詞・副詞修飾の語に限定され、動詞を修飾する強意副詞は動詞の *degree modifier of verbs* (動詞の程度修飾語) と呼ばれることが多い。強意語には段階性のない語を修飾する *maximizer* のタイプと、段階性のある語を修飾する *booster* の二つのタイプがある。現代英語では、例えば *quite* などが、これら両方の性質をもち、修飾する動詞の種類や解釈のモードに応じて、このいずれかの役割を果たす (Diehl 2005)。 *I quite understand* では、*understand* が段階性を持たない動詞であるために、*quite* は *maximizer* として振舞い、 *I quite fancy this* では、*fancy* が段階性のある動詞であるため、*quite* は *fancy* がもつスケールをより高次に引き上げる *booster* として機能する。動詞の意味特質に対し、段階性の有無が議論される場面は少ないものの、この先行研究が示したように確かに現代英語の *quite* の振舞いは、動詞に段階性の有無の区別があるということを示している。

3. スケールと評価性

評価的意味を多分に含む形容詞の場合、例えば、*quite good* という表現は、文字通り「とても良い」という意味にもなるが、ニュアンスや文脈によって皮肉的な意味合いに転じ、実際には話し手が評価対象に対して、否定的な評価を下している場合も多い。反対に、イギリス英語では *not too bad*、アメリカ英語では *not half bad* は、「結構いいね」といった意味で広く知られる、肯定的な評価を表す表現である。*good* や *bad* といった評価的意味の強い語は、このように表現形式と意図される意味合いが、逆になって現われることが多い。しかし、ここで重要なもう一つの点は、これらの表現が、*quite*, *half*, *too* といった程度副詞・強意語によって、修飾されているということである。

研究成果の概要 つづき

強意語に、話者の評価対象に対するスタンス・視点である評価性が常に伴うことは、ある種当然の事実として、特別に取り上げられることは少なかった。しかしながら、強意副詞の役割がスケールを上昇させる機能だけではなく、評価的意味を付与する機能を持つということは、強意語の意味変化を考察する上で、非常に重要な要素であると言える。

4. 「速い」の評価性

昨年度までの研究結果では、*fast*は中英語後期以降、多くの動作動詞・移動動詞を修飾したことが明らかとなった。動作動詞・移動動詞を強意副詞が修飾すると、なぜ「迅速」の意味が派生し、その後強意副詞自体の意味へと定着していくのか。

MEDにおいて、強意副詞である *much* は、*comen (wenden) as much* といった表現で、移動動詞である *come, go* を修飾した場合、*to come (go) as fast as* といった意味になることが説明されている。*much* の基本的な意味は ME においても、その語義は現代英語を大きく変わりはなく、量・程度に対して、それらのスケールを上昇させる働きがある。しかし、なぜ MED で説明されるように、移動動詞を修飾する副詞 *much* は、「速く」と解釈されるのか。

これは、ME に特異な要素ではなく、Bolinger (1972) においても興味深い考察がある。Bolinger (1972) では、*Why does he run so (fast)?, I wish you wouldn't whisper so (softly), It sticks so (tight) I can't get it loose.* といった文において、括弧内の副詞が存在しても、文意にほぼ差が生じないと説明している。それぞれの動詞が強意副詞 *so* により修飾される場合、*run* であれば、強意される意味合いは 'fast' (速度) になり、*whisper* の場合は、'softly' (より静かに囁く状態)、そして *stick* であれば、'tight' 「粘着度の強さ」であるということになる。

ここまで、移動動詞を強意副詞が修飾すると「速い」といった迅速の意味で解釈されることを MED と Bolinger (1972) の記述からみてきたが、強意と迅速の相関性を考えるもう一つの視点として、ME における強意副詞の一つである *also* に関する Mustanoja (1960) の解説がある。Mustanoja (1960) では、強意副詞である *also (as)* は動作の速さや即時性を表す副詞のみを修飾したことが説明されている。例えば、*blive, fast, quick, soon, swithe, tite* 等の副詞がその例として挙げられている。なぜ強意副詞 *also (as)* は、「速く・すぐに」といった語義の副詞のみを修飾対象にとるのか。強意副詞が評価的意味を必然的に伴う性質があることを鑑みると、歴史的に、動作における「速さ」は、肯定的に捉えられていたと考えることができる。

強意副詞の機能には、修飾対象のスケールの上昇に加え、評価的意味の上昇も含まれると言える。評価性の観点から意味変化の動機付けを考察することで、なぜ *fast, swithe* にはじまり、その他多くの強意的意味を本来もっていた語が、「迅速」の意味へと変化していくのかという、複数の語の意味変化に共通した動機付けを説明することができる。より多くの事例を対象に、「迅速」の意味の評価性を考察する必要があるが、今年度はこれまでの量的分析から得られた結果をもとに、スケールと評価性という新たな視点から、意味変化の説明を試みることにできた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

小笠原清香「強意副詞の脱語彙化とその後の展開：強意から迅速への意味変化」『語用論研究』(日本語用論学会) 15, 2014 年 8 月, 24-41 頁

④ その他

学会発表

小笠原清香「強意副詞の脱語彙化と再語彙化：強意から迅速への展開」2014 年度立教英米文学会, 12 月 20 日, 於立教大学池袋キャンパス

ゲストレクチャー

小笠原清香 “Intensifiers and their semantic development with some reference to scale and evaluation” 2015 年 2 月 10 日, 於国際基督教大学